

注解『七十一番職人歌合』稿（三十三）

下 房 俊 一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第六十九番から第七十一番までの注解を収めた。

六十九番 華嚴宗 俱舍宗

〔職人尽〕

〔人倫訓蒙図彙〕俱舍宗 天竺世親菩薩の所立也。人皇四十二代文武天皇の大長九年三番に渡る也。立つる所俱舍論也。
／ 花嚴宗 震旦花教和尚の所立也。人皇四十六代孝謙天皇天平宝字六年甲午に六番に渡る也。良弁僧正始めて興す。
用ゆる所花嚴經也。 〔誹諧職人尽〕 けごん宗 東晋の学賢三藏華嚴經を訳せられける時、庭前の池中より忽百葉の蓮花生じけると也。三界唯心のころを 心より外には法の舟もなししらねばしづみ知ればうかばん わたるべし蓮の花びら法の舟へ桃兆▽ 作りかなはや序開きに詰のはなへ亀毛▽ 口きりや衆生はいまだ呑みこまずへ永我▽ 池水に雨もかほるやはすの花へ市宝▽ 法且が雪道明るあしたかなへ寥和▽ 俱舍宗 初霜に行や北斗の星の前へイカ 百歳▽ 東大寺にて兼学ありといふ事を 大仏に副て花とや蘭奢待へ桃兆▽ くしやくしやくと糊こは晒奈良法師へ亀毛▽ 俱舍をた

て入にしてげん宗の心を うつくしや五時のひとつを法の花へ心祇▽ 狂歌 題俱舎華嚴法花 拾遺哀傷 ほけ経をわ
 がえし事は新こり菜つみ水波つかへてぞえしへ大僧正 行基▽ くしやくしやと年はよりてもたしやさの菜つみ水くみ毛
 ごんぼうひくへ栢筵▽ 俱舎論十煩惱のころを 伊勢で覚るとうの眠りや吉田祭へ寥和▽

【本文】

六十九番

我のりのむしろいかにとひとゝはゝ

清瀧川にすめる月かけ

われにとへやすくこたへむ月しはし

北をめくるかつちをめくるか

左右ともに、ふかき心をつたへされは、まさる

おとる申かたし。左は、さためて其心ふかゝる

へき歟。清たきのなかれはかりかたし。右は、

くしや論にもかたゝあらはし侍にや。それ

猶定かたきにや。なすらへて為持。

おもふ人あはれ茶すきになりたらは

つみしらすへきときもあらまし

まつひとのくるやゝとおもふまに

ほくとのほしをまほりあかしつ

左哥、恋に茶のよせをもとの侍事、才学

すくなし。右、人を待とて心ならず北斗を

のりー〔類〕法 ひとゝはゝー〔明〕〔類〕人とはゝ

やすくこたへむー〔類〕易く答ん しはしー〔白〕しけ

つちをめくるかー〔類〕土を巡るか

ふかきー〔類〕深き まさるおとるー〔類〕まさりをとり

さためてー〔類〕定て ふかゝるへき歟ー〔類〕深かるへき歟

清たきのなかれー〔類〕清滝の流

くしや論ー〔類〕俱舎論 かつゝゝー〔尊〕〔白〕〔忠〕〔明〕〔類〕

かたはし 侍にやー〔類〕侍るにや

おもふ〔類〕ー思ふ なりたらはー〔類〕成たらは

つみしらすへきときー〔類〕摘しらすへき時

まつひとー〔類〕待人

ほくとのほしー〔類〕北斗の星

もとのー〔尊〕〔白〕〔忠〕〔明〕もとめ〔類〕求 侍事ー〔類〕

侍ること 才学ー〔忠〕才覚
 すくなしー〔類〕少し

まほる、さもありぬへし。仍、右為勝。

けこんしう

御ゑいくの御

茶のゝこり

にて候。

くしやしう

北斗の御祈

はしめ候間、

ひまなく候て。



まほるー〔類〕守る ありぬへしー〔類〕有ぬへし

けこんしうー〔白〕〔類〕華嚴宗〔忠〕六十九番華嚴宗

御ゑいくー〔白〕〔忠〕御影供 御茶ー〔白〕〔忠〕茶

ゝこりー〔白〕〔忠〕残

くしやしうー〔白〕〔忠〕俱舍宗〔類〕俱舍しう

〔語注〕

◎華嚴宗は、『華嚴経』を所依とする宗派。唐の賢首大師法蔵を始祖とし、我が国に伝わった。東大寺が根本道場であるが、鎌倉初期、明恵が洛西梅尾に高山寺を開き、以降、東大寺派と高山寺派とに分かれた。室町中期以降は、両派ともに衰退した。本歌合では、月の歌に「清瀧川」、恋の歌に「茶」を詠み、また、画中詞にも「御影供の御茶」のことを言つて、高山寺ないし明恵を意識している。ここでは、華嚴宗の僧の意。

俱舍宗は、『俱舍論』などを所依とする宗派。我が国には法相宗とともに伝わり、東大寺を本拠としたが、一宗を立てるに及ばず、平安初期、法相宗の寓宗となった。ここでは、俱舍宗の僧の意。

◎のりのむしろ 「法筵」の訓読語。仏法の修行・法会・説教などが行われる場。「さらにまた花ぞふりしくわしの山のりのむしろのくれがたのそらへ俊成」(千載集、十九、釈教歌)など、歌にしばしば用いられる言葉。

◎ひとゝは、「人間はば」は、「君をいのる心の色を人とはばただすの宮のあけの玉がき入慈円」(新古今集、十九、神祇歌)のごとく、和歌の第三句にしばしば用いられる表現。

◎清瀧川にすめる月かけ 「清瀧川」は、山城国葛野郡(現京都市右京区)の棧敷ヶ岳に発し、愛宕山の東麓を流れて保津川に注ぐ川。歌枕。清流で知られ、「石ばしるみづのしら玉かずみえてきよたき川にすめる月影入俊成」(千載集、四、秋歌上)など、このように、川面に映る月影を詠んだ歌は少なくない。その西岸に高山寺がある。ここは、その縁で「清瀧川」を出した。全体で、象徴的に、明恵の法流の優れていることをいう。

◎しはし 白石本は「しけ」とするが、誤写であろう。

◎北をめくるかつちをめくるか 未考。『俱舎論』に日月の運行などについて論じた章があるので、そのあたりのことと関わりがあるか。

◎左右ともに、ふかき心をつたへされは、まさるおとる申かたし 「まさるおとる」は、類従本は「まさりをとり」とする。それでも意味は通じるが、誤写であろう。判者自身が、華嚴宗・俱舎宗の深い教義を伝えていない(知らない)ので、歌の勝劣を判定しがたい、というのである。

◎清たきのなかれはかりかたし 「清瀧の流れ」は、高山寺の法流を象徴する。深遠な華嚴宗の教義は、自分(判者)には十分に理解しがたい、というのである。

◎くしや論にもかたくあらはし侍にや。それ猶定かたきにや 「かたく」は、尊経閣本・白石本・忠寄本・明暦板本・類従本、すべて「かたはし」とする。底本の誤写であろう。判者も『俱舎論』との関わりを想定はするものの、具体的な関係については分からなかったたのであろう。

◎なすらへて為持 歌合判詞の常套句。左右の歌の優劣を定めがたい場合に用いる(十九番語注「なすらへて為持」の項参照)。

◎つみしらす 「抓み知らす」で、相手に恋の苦しみを、身をもって体験させる意か(十二番語注「つみしりぬ」の項参照)。「抓み」に、「茶を摘む」の「摘み」を掛ける。

◎まつひとの…… 女が男を待つ歌、と見るべきであろう。

◎くるや／＼ 「来るや」は、「思ひあまり黄楊の小櫛に占ぞとふ我が待つ人は来るや来ずやとへ今出川二条」(菊葉集、十二、恋四)などの例がないではないが、歌に用いるのはきわめて稀。あるいは、俱舎宗関係の用語を掛けるか。

◎ほくとのほしをまほりあかしつ 「北斗の星」は北斗七星。密教では、北斗七星を供養して延命や除災などを祈る「北斗法」という修法を行う。ここは、「北斗法」を修しているわけでもないのに、恋人を待っているうちに北斗七星を見続けて夜を明かした、というのである。

◎恋に茶のよせをもとの侍事、才学すくなし 「もとの」は、尊経閣本・白石本・忠寄本・明暦板本は「もとめ」、類従本は「求」とする。底本の誤写であろう。「寄せ」は、歌論用語で、ある事柄に関連する言葉。縁語など。「才学」は、歌を詠む上での機知・工夫(四番語注「我道のさいかく、まことにきこえたり」、および四十四番語注「才学」の項参照)。恋と茶との取り合わせが不自然だ、というのであろうか。

◎心ならず そのつもりもないのに。

◎御多いくの御茶 「御茶」は、白石本・忠寄本は「茶」とする。「御影供」は、宗祖などの画像を掛けて供え物をする法要。ここは、高山寺の開山明恵の供養を指すのであろう。明恵が栄西から贈られた茶種を梅尾で栽培したこと因んで、茶を供えたものと思われる。

◎北斗の御祈 北斗法(「ほくとのほしをまほりあかしつ」の項参照)のこと。

〔絵〕

華厳宗は、僧衣を着、左手に茶托に載せた茶碗、右手に茶筴を持って、茶をたてるところ。左に、盆に載せた茶托・茶碗・棗・水指。

俱舎宗は、僧衣を僧綱領そうこうりやうにして着、袈裟を掛け、右手に扇を持つ。右に、経本三冊。

七十番 楽人 舞人

〔職人尽〕

〔鶴岡放生会職人歌合〕 一番

左 楽人

ものゝねや月の宮こにかよふらんのほりし橋の跡を尋て

一夜たにあふことしらぬ笛竹のあなうたてともいひきかせはや

右 舞人

たちまふに入日をかへす袖そかしおしまはとまれ山の端の月

立るにも手なるはかりのゆへやあると恋しき人のひさまきもかな

判云、月は、左の哥、のほりし橋のといへるを思わたるに、羅公遠か事にや侍らん。まことに思風とをくあふきて、玄宗のあそひにかよひ、詞露あさやかに見えて、赤人か様を習へり。右哥、入日をかへす袖は、魯陽公かためしを引て、羅^三凌^三王のたすけとなせるとこそ。両首ともに、温故知新と云へし。然而、月宮の仙遊は猶たかくやこえ侍らん。仍以左為勝。恋は、左の笛竹のこと葉にはいたくめつらしきふしもなく、すかたなにとなくことこもりて、さる手つかひもや侍らんとゆかしければ、尤以右為勝。

〔人倫訓蒙図彙〕舞楽 楽人、唐土よりはしまれり。楽調妙なる事、仏神を感ぜしめ、人倫を和げ、心をすましむるの法要なり。

すべて一切の楽器をとる役人を伶人ともいへり。諸流有て、京楽・奈良楽等の家をたつるなり。天王寺にあり。〔非諧職人尽〕

楽人・舞人 笙の音の自然自然に肌さむしへ越谷 千鳥▽ 鶯がねは我を舞つつ紅葉の賀へ沾淵改 合浦亮▽ 舌になる芦も年

貢の数なるかへ寥和▽ 舞人に幾度指を折にけりへ荷兮▽ 吹風に舞の出来たる小蝶哉へ出羽 重行▽ 舞人の袖ものどかや日

の光ハ柳隣▽ 感応の風に動くや鳥甲ハ旧馬▽ こととし舞茸がりに鳥甲ハ家和▽ 〔職人尽発句合〕三十三番右 楽人 ひと
るがへす雲の羽袖や蝶の舞 有渡浜の松風に吹つたへたる東あそびは、こまもろこしの秘曲にもおさおさをとらじながら、猶初
さくら（左句）賞翫すべし也。

【本文】

七十番

おもしろや竹のしらへにしたかひて
夜ことの月もこゝろすむかな
いりかたの月にまはゝやれうわうの
日影をかへすはちの手つかひ

左、大かた、管のこゑ、よにしたかふへき道理
はきこえたれとも、右、入日に月をなすらへ、
はちにてまねく事、かの宇治の宮のこと、
思よせたるにや。ゆへあるにゝたり。以右為勝。
吹たてし河よりをちのふえのねの
ゆかしとせめてきく人もかな
袖ふらはなみたや見えんからひとの
たちまふこともいかゝとおもふ
左右ともに、かのにほ宮の宇治を思よせ、
光君のそてうちふりし事になすらへて、

おもしろや―〔類〕面白や

こゝろ―〔類〕心

いりかた―〔類〕入かた れうわう―〔類〕陵王

こゑ―〔類〕声

きこえたれとも―〔類〕聞えたれとも なすらへ―〔類〕准らへ

まねく事―〔類〕招くこと

ある―〔類〕有

ふえのね―〔類〕笛の音

きく人―〔類〕聞人

なみたや見えんからひとの―〔類〕涙やみえんから人の

たちまふ―〔類〕立まふ おもふ―〔類〕思ふ

うちふりし―〔類〕打振し

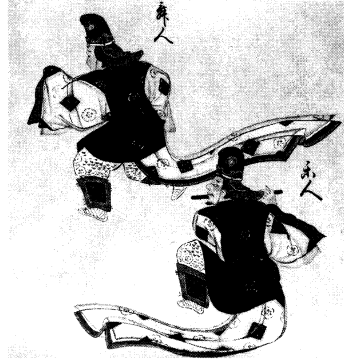
おもひの色をいへり。ともに、やさしくきこゆ。よき持と申侍へし。

◇ ◇

きこゆー〔類〕聞ゆ

楽人

舞人



楽人ー〔忠〕七十番楽人

〔語注〕

◎楽人は、朝廷や大社寺の楽所などに所属して、雅楽の演奏をする者。

舞人は、同じく、舞楽（雅楽の伴奏によって舞う舞）を舞う者。

◎竹のしらへにしたかひて夜ことの月もこゝろすむかな 「竹」は、竹の笛。ここでは、雅楽に用いる笙・篳篥などを指す。「夜」に、竹の「節」（節と節との間）を掛ける。「澄む」に、月が「澄む」意、および、笛の音が「澄む」意を掛ける。笛の美しい調べに引かれて、月も心澄むように美しい、というのであるが、判詞にも言うとおり、笛の音が節に従って決まるといふ事実を踏まえた表現か。

◎いりかたの月にまはゝや 舞楽「陵王」（次項参照）は日を招き返す舞であるが、入り方の月に向かって舞って月を

招き返そう、というのである。

◎れうわうの日影をかへすはちの手つかひ 「陵王」は、舞樂の曲名。また、この曲のモデルとされる人の名。

この曲の由来については、『教訓抄』一に、北齊の蘭陵王長恭の故事を引き、この説が広く流布しているが、しかし、同書は、「又云」として、次のような一説をも挙げる。

脂那国二人王アリ。トナリノ国ノ王ト天子ヲアラソヒケル間ニ、彼王崩畢。其子即位シテ、ナヲアラソヒヤマザリケレバ、太子、王ノ陵ニ向ヒ給テ、ナゲキ申サレ給ヒケレバ、忽墓内コエアリ、雷電シテ占_三子_三王_三ニ云ク、汝ナゲクコトナカレトテ、則現_三此形_三赴_三戰陣_三、竜顔美鬚不_レ異。日スデニクレニヲヨビテ、戦ヤブレスベシ。爰父王飛_三神魂_三日ヲ搔_三、仍蒼天午時成了。サテ合戦。如_三思国ヲウチトリテケリ。サテ世コゾリテ、コレヲ歌舞ス。名_三没日還午樂_三。雖_レ無_三本文_三、自_三古者_三伝也。(思想大系・古代中世藝術論)

また、同書には、

旧譜、作_三竜王_三。此舞、合戦之間_{ツカケ}鬪死、已埋_三墓郎_三等。樂尊來訪之時更生又鬪云々。

との注記も見える。

これらの説話と同系と思われるものに、御伽草子『還城楽物語』に見えるそれがある。

天竺還国の王還城楽は、隣国竜国の王竜王を殺して、竜国を併呑した。三年後、竜王は蘇り、還国を攻撃するが、多くの兵を失い、娘の馬頭女となつそり(納曾利)の大臣と三人だけで敗走する。そのとき、虚空から呼びかける声があった。その声にしたがって、竜王は、「たいこのはち(撥)をおつとつて、とう／＼とらんじやうし」、馬頭女に「ばちがへり」を舞わせなどして、「いり日を三度まねかせたまへは、西の山のはにかたふき給ふ日のかげの、竜王にまぬかれて、さら／＼とうちかへり、もとのあさ日のかけとおかまれ給」うた。すると、修羅、梵天、帝釈などが天下って竜王を助けたので、竜王は戦いに勝ち、逆に還国を併呑した。(室町時代物語大成・四)

(幸若舞「入鹿」などにも類話が見える。)

『還城楽物語』が、登場人物や彼らが舞う舞の名からして、舞樂の「拔頭」「納曾利」「陵王」「還城楽」の四曲と密

接な関係があること、特に、「陵王」が撥を手にして舞う曲であること、また、その別称を「没日還午楽」と称すること、さらに、『還城楽物語』の主人公の名「竜王」が、『教訓抄』にいう「旧譜」の曲名と一致することからして、舞楽「陵王」がこの説話にもとづいて作られたか、少なくとも、かつて、そう信じられていた可能性を否定できない。

古く『源氏物語』橋姫巻に、「入る日を返す撥こそありけれ」（後掲「かの宇治の宮のこと」の項参照）という言葉が見えること、および、この言葉について、『源氏釈』が、「げんじやうらく、陵王をあやぶめんとするに、日のくるれば、ばちして日を手かき給に、ひきかへされたる事也」と注すること、右の推定を裏付けるであろう。

『鶴岡放生会職人歌合』一番右舞人の月の歌に、「たちまふに入日をかへす袖ぞかしおしまばとまれ山の端の月」とあり、その判詞に、「入日をかへす袖は、魯陽公がためしを引て、羅凌王のたすけとなせるところ」とあるのも、この線で理解できる。

以上の推定より、ここは舞楽「陵王」を典拠とする表現と考えたい。ただし、判詞にもいうごとく、『源氏物語』橋姫巻をも意識しているかもしれない。

◎管 「くわん」と読む。管楽器。

◎かの宇治の宮のこと 『源氏物語』橋姫巻に見える話。八宮の娘、中君が琵琶の撥をまさぐっていると、雲に隠れていた月が急に明るくさし出たので、「扇ならで、これしても月は招きつばかりけり」と言うと、姉の大君が、「入る日を返す撥こそありけれ。さまざまにも思ひおよび給ふ御心かな」と答えた、という。

◎ゆへあるに、たり 「ゆゑあり」は、古い歌や詩、物語などを思い起こさせるなどのような、由緒深い表現についていう。「空階雨滴、落葉恣深などいへるふるき心、なにとなく思ひ出でられて、ゆゑあるさまに侍れど」（建保二年内裏歌合、十六番判詞）などと、判詞に用いられる。

◎吹たてし…… 判詞にも言うとおり、『源氏物語』椎本巻を典拠とする。同巻には、宇治の夕霧の別荘に宿った匂宮が笛などを奏したところ、その音が宇治川の対岸にある八宮の別荘に届いた、とある。

◎河よりをち 川の対岸。『源氏物語』椎本巻に、「（夕霧の別荘は）川よりをちに、いとひろく、おもしろくてあるに」

とある。

◎袖ふらは……判詞にも言うとおり、『源氏物語』紅葉賀巻に見える、光源氏と藤壺女御との歌の贈答を本文とする。紅葉賀の試楽で源氏が青海波を舞った翌朝、源氏が藤壺に、「物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりし心知りきや」という歌を贈ったのに対し、藤壺は、「唐人の袖ふることは遠けれど起ちるにつけてあはれとは見き」と答えた。

◎袖ふらは 「袖振る」は、袖を振って舞うこと。光源氏のように、物思いのため舞うことができないほどの身で、あえて舞を舞ったら。

◎なみたや見えん それまで袖で隠していた涙を人に見られてしまふであろう、というのである。

◎からひと 唐人。藤壺の歌で源氏を暗示するように、ここは舞人自身を暗示する。

◎たちまふこともいかゝとおもふ 物思いのために、立ち舞うこともおぼつかない、というのである。

◎おもひの色 心に思っている様子。

◎やさしくきこゆ 「やさし」は、歌論用語で、女性的な優美、繊細な感情や情趣についていう（和歌大辞典「やさし」の項）。

〔絵〕

楽人は、鳥兜を被り、下襲の上に半臂を着、差貫・踏懸ふかけ・糸靴ひきを履いて、横笛を吹く。

舞人は、同じ衣装で、舞を舞う。

〔参考〕

○日も既に傾きぬ、日も既に傾きぬ。山の端を眺めやりて招き返す舞の手の、嬉しや今こそは、思ふ敵は討ちたれ。

（謡曲「富士太鼓」）

〔職人尽〕

〔人倫訓蒙図彙〕 酢 和泉の酢、名に高し。ある書に、酢は聖人もこのみ給しとなり。勸善書にも、酢食して眼を開かしむ、とあり。されば、老子は西にゆびさして酢を求む。釈迦仏は二君子の酢をあいし給ふをよんで、酢吸と号し給ふ。酢坪（すく）に右の三像を絵がいて、三吸とも酢吸ともいふ。〔狂歌種ふくべ〕心太 大学の道はたでうるところてん一盃四銭に止るといへり 〔俳諧職人尽〕酢作り 恵美須講酢うりに袴着せにけりへはせを▽ 酢つくりの麴の側やむめのはなへ松巴▽ すつくりの梅に慣や水かげんへ兆賀▽ 酢つくりの鼻をはちいて梅の花へ冲而▽ きた風の身にしむ暮や塩がつほへ蓮外▽ 煤の日の北風寒き鱸かなへ豊水▽ 酒は酔に成て侘しや秋のくれへ寥和▽ / ところてん壳 涼しさや心手へとる水のいろへ嵐雪▽ 水門の内を呼せんところてんへ序令▽ 遊ぶ事白雲深きところてむへ白雲▽ 水ゆれて井桁になるやところてんへ二世 節土▽ 道野辺のやすむ木陰や心太へ尺波▽ 醬油にも三輪の印やところてんへ道雲▽ 腰かけて喰ふが作法かところ天へ佳節▽ 道野辺に清水流るる大凝菜へ桃兆▽ 静さは浪のすだれやところてんへ暁雨▽ 蕎麦くさき佛もあり石花菜へ梅徳▽ 鬼灯やまりと蹴上のところてんへ甫琴▽ 松一木てりのこしけりとところてんへ万舟▽ 秋もはや愼たつやまぞ心太へ文東▽ ととてん女房に見世を預けけりへ谷水▽ 木の下や爰も涼しきところてんへ咫斗▽ 追わけやいやといはれぬところてんへ祇亟▽ ころろ手へ渡すぞ是を文とよめへ寥和▽ 〔職人尽発句合〕 十四番右 酢造 夜るうらぬ門を水鶏の叩けり ……何のゆへに夜るうらぬとは、酢つくりもしらずながら、叩く水鶏にこたへざる律儀もすてがたくて、持とす。〔職人尽狂歌合〕右 酢造 月見れば老子孔子に釈迦も吸ふ三盃漬の酢や造らなん ……右、結句、こころえぬいひさまなり。つくらなんといふは、ねがひのなんなるを、上になや文字ある、いとみだりなり。や文字あらば、下は造りなんとこそいふべけれ。つくらなんとはいふべからず。きしちひみりの詞を、かきたはまらに転じていふは、ねがふ心のなん也。たとへば、ゆきなんは、常のなん也。これを、ゆかなんといふ時は、

ねがふ心也。あひなを、あはなん、やみなを、やまなんの類、おしてしるべし。左、またき勝にこそ。 / 左 酢造 秋の夜のしるしと見へて酢造のすみわたりたる月の丸勘 左、酢をいれたる樽にさるしあるをとり出られし。いたらぬ所なき作者なるべし。…左の酢屋勘三郎、あまりに名のりこちこちしければ、なかなかのりせぬ箔打のかたに、ゆかしげはそひ侍りぬべし。〔近世職人尽絵詞〕 心太亮 「こころぶとめせ。水晶もてつくりたる拍子木のやうに、きよらにて候。きなこ入候へきか、しやうゆ入候へきか」「こはひややかでよきぞ。いま一つきすすらばや」「百けもなからけも、いくらもめせ。あつさをわすれ候ぞ」

【本文】

七十一番

さもこそは名にほふ秋のよはならめ
あまりすみたる月のかけかな
うらほんのなか半のあきの夜もすから
月にすますやわかこゝろてい

左、あまりといひて、すとはきこえたるを、
かさねてすとよめるや、いかゝ。右は、うらほんの
よもすから心ふとうる事、しかり。心ていきく
心地す。右可勝。

いつまでか待よひことのくちつけに
あすや／＼といふをたのまむ
我なからをよはぬこひとしりなから
おもひよりけるこゝろふとさよ

ほふー〔忠〕〔明〕〔類〕 おふ よはー〔類〕 夜半
すみたるー〔類〕 澄たる かけかなー〔類〕 影哉
なか半のあきの夜もすからー〔類〕 なかはの秋のよもすから
わかこゝろていー〔類〕 我心てい
きこえー〔類〕 聞え
事ー〔類〕 こと
待よひー〔類〕 待宵 くちつけー〔類〕 口つけ
こひー〔類〕 恋
おもひよりけるー〔類〕 思よりける こゝろふとさー〔類〕
心ふとさ

左哥は、酔つくる人は、あすや／＼といひて、祝
ことにするといへるをよめるにや。えんにきこゆ。

右は、下句よろし。とり合て、持にて侍へし。

すつくり

あ、すし。

きかき哉。

心ふとうり

心ふとめせ。

ちうしやくも

入て候。



〔語注〕

◎酔作は、米酔を造る者。

心太売こいぢかたは、心太、すなわち今いう、ところてんを売る者。心太は、月の歌にあるように、「こころてい」とも言ったらしい。『南留別志』一に、「職人歌合に、太凝菜こいぢかたを売る人の、こゝろていとよぶといふ事あり。それより又、ところてんとなれるなり」とある。

心太に酔をかけて食べることから、両者が番わたるのであろう。

◎名にほふ 「ほふ」は、忠寄本、明暦板本、類従本の「おふ」とあるのが正しい。

◎あまり 副詞の「あまり」に、酔の異名「あまり」を掛ける。酔の異名「あまり」は、時代は下るが、『嘉良喜随筆』

左哥―〔類〕左歌

すつくり―〔白〕〔類〕酔造 〔忠〕七十一番酔造

心ふとうり―〔白〕〔忠〕〔類〕心太うり
心ふと―〔白〕〔忠〕こゝろふと

五に、「酔ヲ日暮テ買コトヲ忌ム。若シ求ムレバ、アマリト云コト、職人尺歌合幸光云、古キモノ也。可見。二出ヅ」とあり、また、柳田国男は、「酔をアマリといふことは、上方では夜分の忌言葉として残つて居るだけだが（民俗学四卷六号など）、中国九州に行くとは是が普通の名であり、鹿児島と南の島々では又アマンとも謂つて居る。米の飯や薯なども余りの物を、壺の中に貯へて作るからと、五島あたりでは説明して居るが、やはり酸くなる前に一旦甘くなるので、アマリと謂つたのでは無いかとも想像せられる」（『食料名彙（七）』民間伝承八—八）という。

◎すみたる 判詞は、「すみたる」の「す」に「酔」を掛ける、と解する。

◎うらほんのなか半のあき 旧暦七月十五日のことであろう。当時、おそらく、干蘭盆の期間中、精霊に心太を供える習慣があつたのであろう。

◎月にすまずやわかこゝろてい 「こころてい」と言つて売り歩く声を澄ませる、というのか。やや分かりづらい。その「こころてい」に、「心体」ないし「心底」の意を掛け、美しい月を見て我が心を澄ます、というのか。ただし、「心体」、「心底」を「こころてい」と読むと分かる例は管見に入らない。「澄ます」は月の縁語。

◎心ていきく心地す 「心てい」という売り声が聞こえるようだ、というのか。

◎くちつけ 口付。口癖。俗語。その意に、味見のために口を付ける意を掛ける。

◎あすやく 判詞にも言うとおり、酔造が上質の酔ができることを願つて、「あ、酔や、あ、酔や」と唱える風習があつたのであろうが、その実態については、未考。「明日や、明日や」の意を掛ける。「あした、あした」と言つて約束を先延ばしにするのである。

◎をよはぬこひ 歌にはほとんど用いられないが、「あさなあさなあまのさをさすうらふかみおよばぬこひも我はするかなへよみびとしらさず」（新勅撰集、十一、恋歌一）のような例がないではない。

◎こゝろふとさよ 「心太さ」は、大胆さ。勿論、俗語であるが、こころてんの意の「心太」に掛けて用いた。本職人歌合、三十七番、素麺売の恋の歌にも、「我が恋は建仁寺なる素麺の心太くも思ひ寄るかな」とあつた。

◎祝こと 祝言。よい結果を招くために唱える呪術的な言葉。

◎えんにきこゆ 「艶」は歌論用語で、表現から感じられる感覚的・気分的情調美（四十番判詞「艶にきこえ侍」の項参照）。ここは、勿論、冗談。

◎とり合て、持にて侍へし 「とり合て」を、『新大系』は「とりあひて」と読むが、「とりあはせて」と読むべきであろう。「取り合はす」は、比較するの意で、本職人歌合では、左右の歌を比較した結果、優劣のない場合に用いている（四十一番語注「とり合て、為持」の項参照）。ここは心太に酔をかけて食べる意を掛けて茶化したか。

◎あ、すし 判詞にいう「あすやく」と同様の祝言であろう。

◎きかき 未考。酔のできたばかりの状態をいうか。三番左塗師の画中詞「きかきのうるしけに候」の「きかき」に通ずるか。

◎ちうしやく 鑿鉦。『中世職人語彙の研究』に、『日葡辞書』の「Chiyacu ave. 南瓜と芥子粉とで作った、ある料理」などを引き、「芥子のことと考えられる」とする（「ちゆうしやく」の項）。傾聴すべき説であろう。なお、方言に、野菜のタカナのことを、岡山県一部、広島県で「ちゆうしやくな」と言うことが報告されている（日本国語大辞典「ちゆうしやくな」の項）。

〔絵〕

酔造は、烏帽子、直垂、袴姿で、右手に杓を持つ。左手人指指を壺の酔にひたして、味見するところか。眉間に縦皺があり、酸っぱい様子。前に、酔壺・壺の蓋・皿。

心太売は、頭巾様のものを被り小袖を着、心太突で心太を突いて腕に入れるところ。右に、曲物に入れた心太・腕二つ・菜刀。

〔参考〕

○むかし推古天皇の御時、一人の酔売、禁中を売りまはる。帝きこしめされ、やあ、あの酔売、こなたへとて召されし

かば、かすこまつて候とて、すい門のはしをするりと渡り、するすると参つてすのこ縁にかすこまる。帝は墨絵の障子をするりと開け給ひ、その時の御詠歌に、住吉の隅に雀の巢をかけていかに雀が住みよかるらん、とあそばされしかば、内裏上郎たちの、こなたへ参れとて、いかにもすい御酒をくだされてある。それよりして、酔売は売り物のかしらにて有る程に、某に札をせずは、はじかみを売らすまひぞ。

(虎明本「酔はじかみ」)

〔補遺〕七十番〔語注〕◎れうわうの日影をかへすはちの手つかひ

脱稿後、以下のこと気づいた。

舞楽「還城楽」と、『源氏物語』の古注、『教訓抄』、御伽草子『還城楽物語』、幸若舞「入鹿」に見える説話との関係については、夙に、麻原美子「舞楽楽曲の伝承話と『還城楽物語』の成立」(『芸能』一九一七―一九七七・七)に詳しい。

また、中原香苗「還城楽説話の伝承」(『中世文学』四一―一九九六・六)は、新たに内閣文庫蔵の楽書『舞楽雑録』所収の説話を紹介しつつ、浅原の論を発展させている。

— 完 —